

2021年3月実施

新中学3年

神奈川県チャレンジ

国語

中2
2022. 3. 5実施

注意事項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は問五まであり、1ページから14ページに印刷されています。
- 3 答えは、解答用紙の決められた欄に、記入またはマークしなさい。
- 4 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。
- 5 マークシート方式により解答する場合は、その番号の○の中を塗りつぶしなさい。
- 6 解答用紙にマス目(例:

--	--	--	--	--

)がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 7 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

所要時間50分



新中学3年
国語

神奈川全県チャレンジ

2021年3月実施 所要時間50分

問二			
(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
(1)	(1)	(1)	(1)
(2)	(2)	(2)	(2)
(3)	(3)	(3)	(3)
(4)	(4)	(4)	(4)

各4点×4＝16点 計16点

問一									
(エ)	(ウ)	(イ)					(ア)		
		d	c	b	a	4	3	2	1
(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	4	3	2	1
(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	4	3	2	1
(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	4	3	2	1
(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	4	3	2	1

各2点×10＝20点 計20点

※解答欄は裏面にあります。
※解答欄は裏面にあります。
※解答欄は裏面にあります。

公開会場使用欄
ここにQRコードのシールを貼って下さい。

【記入上の注意】
番号はすべて、頭に0を付けて桁の桁数に合わせる
(生徒番号の例) □□11234 → 0011234

教科	団体コード(4桁)	教室コード(3桁)
104		

氏名

問五	
(イ)	(ア)
(1)	(1)
(2)	(2)
(3)	(3)
(4)	(4)

各4点×4＝16点 計16点

※解答欄は裏面にあります。

問四						
(ウ)	(キ)	(カ)	(ク)	(コ)	(ク)	(ケ)
(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)
(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)

各2点×7＝14点 計14点

※解答欄は裏面にあります。

問三					
(カ)	(キ)	(ク)	(ケ)	(コ)	(カ)
(1)	(1)	(1)	(1)	(1)	(1)
(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)
(3)	(3)	(3)	(3)	(3)	(3)
(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)

各4点×6＝24点 計24点

この部分がマークシート方式による解答欄です。
注意事項

- HBまたはBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使用して、○の中を塗りつぶすこと。
 - 答えを直すときは、きれいに消して、消し残さないこと。
 - 数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れること。
 - 解答用紙を汚したり、折り曲げたりしないこと。
- ※ この解答用紙はコピーを取ったものはご利用頂けません。

生徒番号									
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	9	9	9	9	9	9	9	9	9

良い例	悪い例

問五	
(イ)	(ア)
を目的として使用している人が一番多いということが読み取れます。	一週間に十二時間以上の時間を
20	
30	

問四	
(イ)	(ア)
II	I
24	

問一			
(ア)			
4	3	2	1
4	3	2	1
(める)			

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の1~4の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代仮名遣いで書きなさい。

1 風景の一部を凝視する。

2 夕飯の献立を吟味する。

3 飛行機が旋回する。

4 自分の態度を戒める。

(イ) 次のa~dの各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1~4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a カンバンが撤去される。

1 新しい雑誌がソウカンされる。

2 海がカンチョウを迎える。

3 物事のコンカンを理解する。

4 家族のカンゴをする。

b 番組がホウソウされる。

1 シャンソウから見える景色。

2 メールをソウシンする。

3 ハンドルをソウサする。

4 ソウシヨク品を身につける。

c 水分をキュウシユウする。

1 歴史のケンキュウをする。

2 ガツキュウ会を開く。

3 落ちていてコキュウを整える。

4 事件がメイキュウ入りとなる。

d やなぎの枝がタレ下がる。

1 スイチヨクな線を引く。

2 読書をスイシンする。

3 部下をタイドウする。

4 タイレツを組む。

(ウ) 次の例文中の——線をつけた「よう」と同じ意味で用いられている「よう」を含む文を、あとの1~4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 明日はよくと一緒に練習しよう。

1 今日はこれから雨がふるようだ。

2 いつかは成功する日が来よう。

3 そろそろお昼の休憩にしようよ。

4 私も彼と同じものを注文しよう。

(エ) 次の短歌を説明したものと最も適するものを、あとの1~4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

はなびら（花びら）に天鷲（てんじゆ）に似たる感じありて手にありて見（み）たきこの紅（あか）うばら

三ヶ島 霞子

(注) 天鷲（てんじゆ）絨（じゆう）織物（じぶつ）の一つ。柔らかな手触りと深い光沢感が特長。

1 天鷲絨（てんじゆじゆう）に似た赤いばらのはなびらを体言止めを用いて結びの句にすることで、作者が花に感じる温かみを効果的に示している。

2 丈夫な天鷲絨（てんじゆじゆう）と触るだけで散ってしまう赤いはなびらを対比させることで、美しいばらが枯れてしまふ切なさ（きりなさ）を表している。

3 赤いばらのはなびらを手触りの良い天鷲絨（てんじゆじゆう）にたとえることで、触れてみたいという作者の感覚を印象的に表現している。

4 天鷲絨（てんじゆじゆう）のような美しいはなびらをもつ赤いはらを手にとって観察する作者の様子を、字余りを多用して写実的に描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある人はいく、もとより、その道々の家に生まれぬは、さることなり、さなきたくひも、ほどほどに

つけては、能（のう）は必ずあるべきなり。なかにも氏（うぢ）をうけたる者、芸（芸）おろかにして、氏（うぢ）をつがぬたくひあり。

道（みち）にあらざるたくひ、能（のう）によりて、道（みち）にいたる徳（とく）もあれば、氏（うぢ）をつがむがため、道（みち）にいたらむがために、

かれもこれも、ともにはげむべし。

なにとなく居（ゐ）まじりたるをりは、そのけちめ見えざれども、芸能（げいねい）につけて、召（よ）し出され、ただうちある

われどちの遊び、かたへにぬき出でて、なにごとをもしたらむは、雲泥（うんじ）の心地して、人目（ひとめ）いみしくおほえ

ぬべし。

すべて、みめよく、品高（しんたか）けれども、あやしくいやしきが能（のう）あるに、立ちならぶをりは、その品、そのみ

めも必ず思（おも）ひ消（け）たるものなり。たとへば、花のあたりの常磐木（とこしほぎ）は、うち見るに、たとへなくさめたれど

も、春（はる）の日数暮（ひかずく）れ、峯（たかね）の嵐（あらし）過ぎぬるのちに、緑（き）ばかり残りて、假（かり）の匂（にお）ひ、とどまらざるがごとし。

されば、

3 桃李（とうり）は一旦（いつたび）の栄花（えいげ）なり

松樹（しょうじゆ）は千年（せんねん）の貞木（ていぼく）なり

といへり。

〔十訓抄〕から。一部表記を改めたところがある。

(注) 常磐木（とこしほぎ） 常に緑の葉をつけている木。常緑樹。

桃李（とうり） 桃やすも。

松樹（しょうじゆ） 松の木。

貞木（ていぼく） 常緑樹の別称。

(ア) 線1 「氏をつがぬたくひあり」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 芸道や家職の家に生まれたのだが、才芸を身につけることを許されなかった人がいること。
- 2 芸道や家職の家に生まれたのに、才芸の能力がなかったために家名を継げない人がいること。
- 3 才芸の能力を身につけたが、芸道や家職の家の生まれでないため家名を継げない人がいること。
- 4 才芸の能力を身につけた人でも、家名を継ぐと才芸がおろそかになると考える人がいること。

(イ) 線2 「雲泥の心地して」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 品位に優劣のある者同士が同じことを行った場合、品位の劣る者が行った物事の結果のほうが人目には素晴らしいと高く評価される。
- 2 才芸がない人が物事を執り行くと、才芸がある人は本来の能力を発揮できなくなってしまい、物事の結果に天地ほどの違いが生じてしまう。
- 3 あらゆることにおいて才芸がない人が執り行うよりも、才芸がある人が行う方が大変素晴らしい感じられ、物事の結果に大きな差が生じる。
- 4 能力のない人が能力がある人と同じことを行えば、人目には能力のない人の行いも素晴らしいので、結果に生じる天地ほどの差が縮まる。

(ウ) 線3 「桃李は一旦の榮花なり／松樹は千年の貞木なり」とあるが、これが意味している内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 身分の高さを誇るのには虚しいが、能力の高さを誇るのには意味がある。
- 2 一時のものを大切にしようとしても、永遠に続くものを大切にしようがよい。
- 3 美しい花を愛するよりも、常緑樹の葉の緑の美しさを愛するほうがよい。
- 4 身分の高さや容貌の美しさは一時のものだが、能力は長く残るものである。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 才芸の能力を持つ人物は召し抱えられてしまい、家業を継げるほどの人物がいなくなってしまうため、才芸の家に生まれなかった人にも機会を与えるべきであると論じている。
- 2 才芸の家に生まれた者でも努力せず家名を継げないこともあり、能力はあるが才芸の家に生まれなかった者とは天地ほどの差があることから、才芸の家に生まれなかった人々は無念だと論じている。
- 3 身分や容姿はいずれ価値が衰えてしまう形だけのものだが、才芸の能力はずっと価値が変わることがないものであるため、努力を欠かさず自分の能力を高めることが大切だと論じている。
- 4 能力の低い人と能力の高い人が並んだときには能力の低い人の方が目立ち、人々は嫌な気分になってしまうため、人間は努力して自分の能力を高めなければならぬと論じている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「小此木」家に仕える「新蔵」は第八龍神丸とともに消えた「小此木孝義」を探してたどり着いた長崎で、暴漢に襲われていた一人の女性を助ける。その女性の名前が「ななえ」であると、後見人の「六兵衛」という男と話しているうちにわかった。

「そのななえの、危うかったところを助けてくれたいうんやから、おれとしてはこれほどうれしいことはない。はじめておぬしを見たときから、顔といい、姿、形といい、いったい何者だろうと怪しんでいたよ。ただの手代風情には、どうしても見えなかった。」

「ただの手代ですよ。ただし野望を持っている手代です。知りたいことはただひとつ、主家の若主人の安否と、行方です。これまでするところを尋ね回りましたが、いかなる手がかりも得ることができませんでした。それがはじめて、船の壊れた弁才船の話を聞くことができました。それだけでも福江島へ来て、よかつたと思っております。」

「そうか。そこまで思い詰めて、こんなところまでやつて来たのか。」

六兵衛は盛んにうなずきながら、新蔵の顔を、まどまりの悪い目でじろじろ見回した。試されている気がして、新蔵も負けじと見返した。この気持ちだけは譲れないと、いつも思っているのだ。

「わかった。思いついたことがひとつあるから、旦那と相談してみよう。明日まで待ってくれ。」

そう言つて、その日の六兵衛は帰った。

翌日、河津屋へ呼び出された。母屋へいくと、今回は一階の奥にある帳台へ通された。

九郎兵衛と六兵衛が待っていた。人払いされているのか、ほかのものはだれも近づかなかった。

「六兵衛から聞きました。主家の若主人を探して、ここまで来られたそうですな。どういふ経緯があつたことか、あらためてお聞かせ願えないかと思ひまして。」

九郎兵衛が言つて頭を下げた。

新蔵はこれまでのことを、すべて話した。

蝦夷地松前より播磨の兵庫湊へ向けて出港した第八龍神丸が消息を絶つたのは、天保六年（一八三五）五月のことだった。季節外れの颶風が何度も襲つてきた年のことで、日本海の各地に、弁才船の難破沈没、大破破船といった被害がいくつか記録されている。

ところが第八龍神丸の行方は、八方手を尽くして捜索したにもかかわらず、まったくわからなかった。

船体、漂流物はもちろん、十六人いた乗組員の遺体のひとつもつかつていないのだ。

第八龍神丸の船籍並びに所有者は播磨室津の豊島屋基兵衛という名目になっていたが、航海そのものは、新潟の廻船問屋三國屋の備船契約による代理航行だった。資金を三國屋が出し、商品も三國屋が仕入れて、その荷を運んでいたのである。

そのため船には、三國屋の率領だった小此木孝義が乗り込んで指揮を執っていた。寄港地の選定から商品の売却まで、商売上の全権利をかが握っていた。孝義は小此木家の当主唯義の嫡子である。いずれ小此木家を継承する人物だった。

新蔵は小此木家に仕える森番の子として生まれ、山や森を庭として育った。小此木家からとくに目をかけられ、七つになると小此木家が設置している手習い所へ行かされ、読み書き算盤はじめ、一人前の人間としてどこへ出されても恥ずかしくない教育や礼儀作法を仕込まれた。

その小此木家の嫡子が海難に遭い、行方知れずになった。小此木家には孝義のほか、男子がいなかった。

六つ下下に佐江という妹がいて、いまではこの佐江が孝義に代わり、小此木家の業務を取り仕切っている。当主の小此木唯義は数年前に隠居し、以後表には出ず、脇から佐江を見守っていた。ふたりとも孝義のいなくなつたことで一言も弱音を吐いたことはないが、それは受けている傷手の裏返しであり、過ぎたこととは忘れようとしている生き方の表れでもあった。

なまじそれがわかつているから、ふたりの心中を思いやるたび、新蔵はいつもいたたまれない気持ちになつてくる。

昨年大坂へ発つ前、新蔵は唯義の部屋へわざわざ呼びつけられた。

「一言釘を刺しておこうと思つてな。」
のっけからいきなり言われた。

「お前に行つてもらうのは大坂であつて、蝦夷地ではないのだからな。うっかり手綱を放したら、蝦夷地はおろか国後、択捉まで行つてしまふんじゃないかと心配しているよ。おまえの気持ちはよくわかるし、うれしいとも思うが、第八龍神丸のことはもう忘れろ。いいな。絶対に自分の力で探そう、なんてことをするんじゃないぞ。」

と、くどいほど念を押されたのだ。

「わたくしはそこに、主人の言い知れぬ悲しみと、苦しみ、忘れようとしながらできない心の傷手を察し、より心苦しくならざるを得ませんでした。それでそのとき、はつきり心に決めました。主人の命には背くかもしれませんが、こうなつたら絶対、自分の力で第八龍神丸を探し出さずにおくものかと。たとえできなかつたとしても、その努力だけは欠かしたくなかつたのです。玉之浦までやつて来たのも、すべてそのため。ほかにはなんの望みもございません。」

「そうか。それで文蔵が見たという、舵の壊れた舟才船の話に執心したんだな。」

六兵衛がうなずいて言った。

「この数年尋ね回つてつかんだ、唯一の手がかりでした。」

「もしその船が、探している船かもしれないとわかつたら、どうするよ。」

「機会と手段さえあれば、どこの国であろうが、探しに行く覚悟はできています。たとえそれが唐天竺、^{（唐かてくていしゆく）}

呂宋、蓬萊の彼方であろうと、行けるどころだつたらどこまでも探しに参ります。」

「飯に行つたとして、帰りはどうするよ。帰る手段はあるのか。」

「行けば行つたで、今度はなんとかして、帰ってくる手段を探します。志を果たさず、異国の土になつてしまふ気はありません。絶対に帰ってきます。どんなことがあろうと、必ず生きて帰ってきますと誓つた人が、郷里にいるのです。」

「さようですか。よくわかりました。あとはこの六兵衛と、お話になつて下さい。わたしはこれ以上、この話には立ち入らないことにしますから。」

と九郎兵衛が言い、この話はお終ひになった。

退出して外へ出ると、六兵衛がついて来た。

波止場まで行つて、常夜灯の見える石垣に腰を下ろした。

「おぬしが言つた、行けるどころだつたらどこへだろうが行く、ということばにひとつ心当りがあつてな。背中でも痒いみたいな、煮え切らない言い方で新蔵の顔をうかがつた。」

「それより、どんなことがあつても、必ず帰ってくる、ということばが気に入つたんだ。おれがその方法をつつてやるとしたら、行つてみるか。必ずここへ帰つて来るといふ、約束つきでだ。」

「行きます。」

六兵衛を見返しながら即答した。

「その船が、唐まで流されて行つたかもしれない、と考えるなら、唐へ行く方法がひとつある。ただし、連れて行つてもらいたいものがひとりいる。その人間を連れて行つた上で、今度はその人間を必ず連れて帰つてきてもらいたい。連れて行つてもらいたいのは、ななえだ。」

「思いもつかぬことを言われ、さすがにびっくりして、あとのことは出なかつた。」

「半月前に、長崎へ入つてきた唐船を見たと言つたよな。」

「見ました。漁師に船を出してもらい、遠巻きでしたが、一周してきました。」

「あれが先に話した、周土斐という男の船なのだ。本人は都合がつかなかつたとかで、今回も来ておらん。その代わり帰りの船で、やえとななえの親娘を、唐まで連れて行くことになつてた。船の名前は萬慶号。鄭琳忠という船長が、周の忠実な部下なのだ。」

「船長が周から、ななえ親娘を連れてこいと、命じられていたということですか。」

「そうだ。周が自分の国で、親娘三人、水入らずで暮らしたいと願つているそうなのだ。ふたりとも覚悟を決め、唐へ渡る気になつてた。」

「どうやつて乗り込むんです。」

「この先に、大瀬崎というところがある。福江島のいちばん西の端だ。帰国する萬慶号をそこで待ち、船が来たおれがふたりを小船に乗せ、送り届ける段取りになつてた。もちろんふたりは、唐へ渡つた以上もう日本へは帰つて来られない。やえも、ななえも、その覚悟だつた。ところがなんちゅうことか、やえが流行風邪に罹つてしまい、三日寝込んだだけであつさり逝つちまつた。これまで長い時間をかけて目論んできた計画が、なにもかも破算だ。何も知らずにやつて来た船長の鄭にとつては青天の霹靂、やえが亡くなつたと聞いて頭をかかえていたよ。」

「ななえの気持ちはどうだつたんですか。」

「ななえも困つた。母親と一緒になら、日本へ帰つて来られなくても、悔いはない。しかし母親抜きとなると話はちがつってくる。父親には会いたいが、ひとりて異国暮らしをするほどの覚悟はない。と迷つていたところへ、おぬしが現れたのよ。」

ただの世間話という口調で六兵衛は言った。

「おぬしが唐天竺だろが、呂宋、蓬萊だろが、主人の息子がいるとなつたら、どこへだつて探しに行く。しかし日本へは絶対に帰つてくる、というから、おれも賭けてみようという気になつた。だつたらななえを連れて行つてもらい、連れて帰つてもらいたい。どうだ。その気があるなら、すぐにでも手配してやるが。」

「お願いします。行かせて下さい。どんなことがあつても、必ずあの子を連れて帰ります。」

「その言葉を聞いて安心した。こうなつたら明日にでも長崎へもどり、船長の鄭に会つて話をすすめてくるわ。」

「わかりました。しかしそういう六兵衛さん、いったいあなたは何者なんですか。」

「ただの世話役だと言つたろうが、お節介を焼くのが好きなんだ。」

なにもかも、狐につつまれたような話だつた。翌日新蔵が目覚めたときには、六兵衛はもう玉之浦からいなくなつてた。

ななえまでいなくなつた。六兵衛に連れられ、長崎へ帰つたというのだつた。

（注）手代 江戸時代、農政を担当した下級役人・商家の使用人。
（志水 辰夫「新蔵唐行き」から。）

舟才船 和船の形状の一つ。
福江島 長崎の五島列島のうちの二島。

蝦夷地松前 現在の北海道松前郡。

颯風 激しく吹く風。

備船 運送のために船を借りること。

倭子 家督を継ぐ子。

文爺 海難事故があったことを「新蔵」に伝えた人物。

唐天然 中国とインド。

蓬萊 古代中国の想像上の神山。

播磨の兵庫湊 現在の神戸港の一部。

播磨室津 現在の兵庫県たつの市にある漁港。

宰領 荷物を運送する際に監督をする人。

玉之浦 現在の長崎県五島市の一部。

呂宋 フィリピンのうちの最も大きい島。

青天の霹靂 突然起こった大事件。

(ア) 線1 「人払いされているのか、ほかのものはだれも近づかなかった。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 何か特別な理由があるのだと思ひ、「新蔵」が話す内容を誰にも聞かれないようにしたかったから。

2 前回は十分なもてなしをできず、今回は客人の「新蔵」に失礼がないように気を遣ったから。

3 人がいて物音がすると話に集中できないので、「新蔵」が冷静に話をできる状況にしたかったから。

4 これから相談する外国と取引する方法は、「新蔵」以外の人に聞かれてはいけない内容だから。

(イ) 線2 「機会と手段さえあれば、どの国であろうが、探しに行く覚悟はできています。」とあるが、このときの「新蔵」を説明したのもとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 これまでの努力を「佐江」や「唯義」に認めてもらうためには、日本だけでなく他の国も探す必要があり、必ず手掛かりを見つけようとしている。

2 たとえ主人の言いつけを破る行為だとしても、「佐江」や「唯義」の心の苦しみや悲しみを察して、何としてでも手掛かりを得たいと決心している。

3 「佐江」では業務を取り仕切るには力不足であるため、「唯義」を安心させるためにも、外国で絶対に手がかりを得なければならぬと感じている。

4 日本中を訪ね回っても手掛かりが何一つ得られないため、「佐江」や「唯義」に失望されないために、どんな場所でも探しに行きたいと思っている。

(ウ) 線3 「思ひもつかぬことを言われ、さすがにびびりして、あとのことが出なかつた。」とあるが、そのときの「新蔵」を説明したのもとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「ななえ」の付き添いとなることで、唐に行くことができるという考えもつかない画期的な方法を提案され、「六兵衛」の発想の豊かさに感心した。

2 唐に渡る手引きをしてくれることと引き換えに、無茶な約束をさせられるのだからと腹をくくっていたが、思いもよらないほど簡単な内容だった。

3 どんな内容でも唐に行くためであれば引き受けるつもりだったが、若い娘である「ななえ」を連れていくことは、あまりに非常識なことだと感じた。

4 唐に行くために提示された条件が、「ななえ」を一緒に連れて行くだけでなく必ず日本に連れて帰ってくるという、予想だにしなかつた内容だった。

(エ) 線4 「ななえの気持ちはどうだったんですか。」とあるが、ここでの「新蔵」の気持ちはふまえてこの部分を明読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 異国の地に行くよりも母親と日本で暮らした方が幸せであるのに、父親の都合で勝手に唐行きを決められてしまった「ななえ」を気の毒に思い、慣れた気持ちは伝わるように読む。

2 母親が病で亡くなったというのに父親が唐から帰ってこないため、天涯孤独の人生を歩むことになったことを聞き、「ななえ」をかわいそうに思う気持ちは伝わるように読む。

3 日本に二度と帰ってこられず、父親だけを頼りに勝手がわからない異国の地にひとり暮らしすることとどう思っているのかと、「ななえ」を心配している気持ちは伝わるように読む。

4 母親が病でなくなってしまうため、仕方なく日本を離れ二度と帰ってこれない異国の地で暮らすことになったと言われ、「ななえ」に同情している気持ちは伝わるように読む。

(オ) 線5 「なにもかも、狐につままれたような話だった。」とあるが、この時の「新蔵」の様子を説明したのもとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「ななえ」を助け、「六兵衛」と知り合い、「孝義」を求めて唐へ行くことが決まる一連の流れがあまりにも順調で、あつげにとられていた様子。

2 お節介を焼くのが好きだという理由だけで、大掛かりな計画を一人で実行しようとする「六兵衛」の行動力を信じられず驚いている様子。

3 「孝義」を探するために唐に渡りたいという「新蔵」の願いにこたえるように船を早急に手配した「六兵衛」の手ざわの良さに感動している様子。

4 すべてが「新蔵」の思い通りに動くようではさすがに計画を信用しきれず、「六兵衛」を信頼しても良いのか半信半疑になっている様子。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「小此木唯義」の命を受けて小此木家の「孝義」の居場所を探すため、異国の唐に向かうことになった「新蔵」の数奇な運命を中心に、比喩表現を多用して印象的に描かれている。

2 行方不明である「小此木孝義」の手がかりがある唐へ向かいたいが、「唯義」との約束を思い出し葛藤をする「新蔵」の心情を中心に、情景描写を交えて象徴的に描かれている。

3 生き別れた父を探す「ななえ」を連れ、仕えている家の嫡子である「孝義」の消息を探す「新蔵」が「六兵衛」と唐に向かう計画を立てる様子を中心に、「新蔵」の視点から描かれている。

4 行方不明になった「小此木孝義」の手がかりを探すために、「ななえ」とともに海を渡り連れて帰ることになった「新蔵」の決意を中心に、会話文を多用した文章で描かれている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たち日本人はどうして「グローバリズム」を、「構造改革」を熱狂的に迎えたのだろうか。それは、私たちが私たちを取り巻く「場」の抑圧性に、もううんざりしていたからに他ならない。そしてそれは日本¹の「前近代性」によるものだ。私たちは考えた。建前に終始する学校ばかり、世間体縛られた親と家庭ばかり、旧態依然とした社会ばかりである。そうした日本の構想、世間体と人の目に縛られた「ムラ」の構造にはとほとほ嫌気がさしていたのだ。

そこにひとつの言説が登場する。日本経済は世界に対して閉じられている。閉鎖的な市場であり、グローバル市場に開かれなければならないという言説である。それは当初は経済的な閉鎖性の指摘であった。いわく、日本独自の規制が閉鎖性を生んでいる。日本独自の慣行が自由を阻んでいる。日本の商習慣が日本の停滞を生んでいる。しかし、それらの指摘は、単に経済的な閉鎖性への指摘ではなく、日本社会全体の閉鎖性、抑圧性への指摘であるかのように私たちに受け取られたのではない。

(中略)

私たちにとって「グローバリズム」とは、閉鎖社会に訪れた黒船のようなものであった。それは第二の開国であり、抑圧的な日本型システムからの解放者であるかのように思われたのである。

しかし、その黒船は本当に私たちに解放し、明るい未来を運んで来てくれるものだったのだろうか。黒船に私たちの未来を委ねる「構造改革」によって、私たちの「生きる意味」は回復されつつあるのだろうか。

私たちは前章において、私たちを抑制するシステムの本質は、「人の目」と「効率性」の合体にあるということを見た。その場の「意図」を察知し、それを効率的に遂行するように命じる「人の目」を過剰に意識し合う私たちの構造が、私たちの「生きる意味」を奪っている。ならば、「構造改革」とはそうした「生きる意味を奪う構造」の改革でもあるのだろうか。

▼まず「効率性」から考えてみれば、「構造改革」は効率性に対する意識をますます強めるものであることは明らかだろう。「構造改革」以後の私たちにとって、「効率性」は人生において意識するべき最大の課題となる。常に「私はいま効率的に生きているか？」という意識を強く持たなければいけない。もし効率的に生きていないとするならば、それはすぐに改善しなければならぬ。効率的に生きている状態が持続すれば、柔道の試合での「指導」やレスリングの試合での「パッシブ」のように、「何故あなたは攻めぬのか？」「何故効率的に生きているのか？」という非難が待っている。常に効率的に生きていること、攻撃的に生きていることは自分の責任であり、もしそう生きたらそれは自分の落ち度であって、社会からどのような扱いを受けても文句は言えないのだ。

A「強化された「効率性」への意識は、あなたがいま属している集団に安住することも許さない。これまでの日本型社会ならば、まずあなたがなすべきはあなたが属している集団の「意図」に対して最大の効率性をもって応えることだった。逆に言えば、その集団の「意図」に添ってさえいけば、その集団における居場所が確保され、ある程度の安定は得られていた。しかし、これからの「効率性」は「いま私がこの集団に属していることは効率的なことなのか？」という問いを常に考えなくてはならない。「効率性」なのだ。「私はいまこの会社についていいの？」「もっと効率的に私自身を生かし、たくさん報酬が得られる別の会社があるのではないか？」「いまこんな学校に行っているの？」「もっと違うものが得られる別の会社があるのではないか？」「もっと私の能力を効率的に生かせる別の町があるのではないか？」

これはある面で私たちの解放ではある。どんな場でも、いちど所属してしまえば、その場の論理に従わなければならず、どんな愚劣な上司にも、能力のない教師たちに対しても、その「意図」を察して従わなければならないというのでは、この世は地獄だ。B「いま私が属している集団に私は満足しているのか？」とチェックし、もし満足していないならばその集団から抜け出し、別の集団を求めて移動するというのは、確かに私たちの自由を拡大し、「生きる意味」を取り戻す行動であるだろう。

しかし、他方でそうした「自由」が常に「もっと効率的に生きる」という脅しに裏打ちされている場合、そういった「自由」をはたして本当に自由であり解放であると呼べるのかどうかは大きな問題である。常に自分のいる場が、最大の効率性を確保できているのかどうか疑い、「考え続けなければいけない」人生がそこには待ち受けているのだ。それは一生自分のいる場に安心できないという人生だ。五年前には最高の効率的選択だったいまの会社がいまその効率性を維持できるかの保証はない。だから私たちは毎年毎年、あるいは毎月毎月「この会社でいいの？」「考え続けなくてはならないのだ。それは実に厳しい人生でもある。そしてここでは、自分の所属している集団や地域への愛着や信頼は一体どうなってしまうのだろうか。

「構造改革」は私たちに厳しい「効率性」の実施を求めるものだ。それは確かにかけた規則や意図が放置されているような閉鎖集団から私たちを解放するきっかけにはなるかもしれない。しかし、それは常に効率的に生きたらなければならないという強迫観念にも似た意識を持ち続けることを私たちに課し、私たちが安心して居る場を奪うような、効率性のあり方でもあるのだ。

さて、「人の目」についてはどうだろうかと考えてみると、そこでも私たちはいつそう強化された「人の目」意識を持たざるをえないことが分かる。「構造改革」後の社会は、「競争」と「評価」が軸になる社会である。会社においても私たちが常に評価され、評価が悪ければリストラされても文句は言えない。これまで以上にほとんどのことがなければ、ちよつと出来が悪くても何とか定年まで勤めおせるという時代ではなくなる。その組織自体が評価に縛られており、そこで効率的な組織でないと評価されれば負け組になってしまうわけだから、組織にとつても「成果を出せない人間」を置いておく余裕がなくなってくる。

また、その評価は非常に短期的なものになってくる。終身雇用制の会社ならば、入社時から数年は人材育成の期間だと考えて、あまり結果が出せなくても将来のことを考えて教育中心の仕事に当てられた。しかし、結果の出せる人材はより報酬の高い会社に転職をしていくといった流動性の高い社会になれば、人材育成に時間も費用もかけたあとに転職されてはかなわない。そういった「フリーライド」(ただ乗り)を恐れて、組織は長期的な視野で人材を育成し、評価するのではなく、短期的な成果に基づいて評価を行うことになる。

こうなってくると私たちは、毎日のように「人の目」を気にしなくてはならなくなる。先月は皆から高い評価を得た、しかし今月はもしかして私の評価は下がり、既に「ダメ人間」と見られているのではないかと、といった疑念がいつでも生じることになる。一週間ごとに定期テストがあって、その点数順に教室での座席配置が決まる……といったような社会である。私たちは人の評価、「人の目」をますます気にするようにならざるをえないのである。

(注) グローバリズムはカネ、モノ、ヒトの国境を越えた移動の自由を善とする考え方。パッシブは積極的な試合を奨励するため、消極的な戦い方を選手にペナルティを与えること。

(ア) 本文中の「A」「B」に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 A つまり B しかし 2 A そして B たとえば
3 A また B だから 4 A だが B なぜなら

(イ) 線1「日本の前近代性」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 世間体と人の目に抑圧されてしまい、昔からの独自の考え方に對して閉鎖的になってしまいう日本の社会の構造。
2 様々な環境において古くからの慣習を破ることが許されないと、日本独自の閉鎖的で抑圧された社会の構造。

- 3 日本のな場や世間体を気にするあまり古い慣習を捨て去り、新しい考え方に縛られる閉鎖的な「ムラ」の構造。
4 新しい考え方をする人がこれまでの慣習を維持する人を場から追い出す、抑圧的で閉鎖的な日本社会の構造。

(ウ) 線2「私たちにとって『グローバリズム』とは、閉鎖社会に訪れた黒船のようなものであった。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 日本型のシステムから解放されるが、新しい規制を強いられるのではないかと警戒した。
2 閉鎖性を生んだ経済における規制が撤廃され、自由な経済を獲得できると歓迎した。

(エ) 線3「構造改革」以後の私たちにとって、「効率性」は人生において意識するべき最大の課題となる。」とあるが、筆者がそのように述べる理由について説明した次の文中の「I」「II」に入れる語句として最も適するものを、本文中の▼から▲までの中から、「I」については五字で、「II」については二字でそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

「構造改革」は私たちに、常に効率的に生きなければならぬという強迫観念のような意識を持つことを課し、効率的に生きれば私たちの「I」できる一方で、効率的に生きられないのであれば、社会から「II」され、改善する必要に迫られるから。

(オ) 線4「ある面で私たちの解放ではある。」とあるが、筆者がこのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 現在の集団を抜け別の集団に移動することは、「生きる意味」を取り戻し利益より意義のある安定を得るための行動であるから。
2 自分にさらなる利益をもたらす集団を求めて移動することは、「生きる意味」を取り戻すための行動であるから。

- 3 自分自身が満足できて効率的に生きられる集団に移動することは、「生きる意味」を得るための行動であるから。
4 集団の「意図」に添うことで居場所を手にするとは、「生きる意味」を考える自由を取り戻すための行動であるから。

(カ) 線5「本当に自由であり解放であると呼べるのかどうかは大きな問題」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 私たちを縛り付ける集団から解放されるようにみえるが、実際は効率性の追求を強要されるため、本当の意味での自由とは言えないという問題。
2 納得のできない規則や意図からは解放されるが、最大の効率性が保証される場所が失われるため、本当の自由を得たわけではないという問題。

- 3 最大の効率性を発揮できる集団に移れるが、結局は意図を察してその場の論理に従わなければならぬため、本当の自由が無くなるという問題。
4 自分の能力を生かせる場所に移れるが、効率性を安定させるための規則や意図からは解放されず、結果的に本当の自由が得られないという問題。

(キ) 線6「毎日のように『人の目』を気にしなくてはならなくなる。」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 短期的に成果が出せなくなると、長期的に人材を育成するための時間や費用を費やす余裕がなくなるため、個人や組織がいつも評価に縛られてしまう社会となってしまふ。
2 人材育成に時間と費用をかけなくなったにもかかわらず、短期的な成果だけが評価されるため、組織からの評価の正当性に疑問を持たざるをえない社会となってしまふ。

- 3 組織は成果を出せない人間を育成しようとせず、短期的に成果を出せる人間だけを評価するため、自分の評価が良いのか悪いのかすらわからない社会となってしまふ。
4 組織は優秀な人材の流出を恐れて、人材育成にコストや時間をかけず、短期的な成果を見て評価するため、個人の評価が定まらず気が休まらない社会となってしまふ。

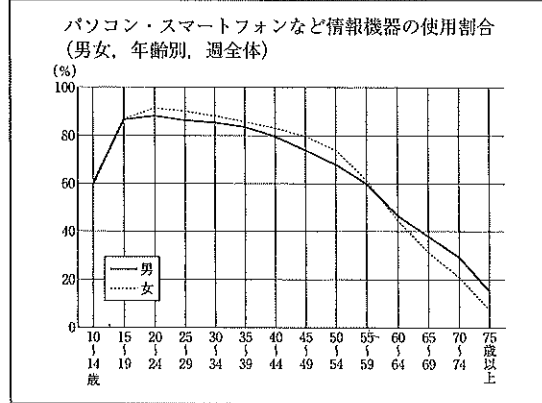
(ク) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 グローバリズムや構造改革を受け入れた後の社会構造と、それ以前の日本の社会構造を対比させ、私たちの生きる意味と関連させながら両者の優劣を論じている。
2 グローバリズムや構造改革で社会構造が変化し、効率性や「人の目」が私たちの生きる意味を充実させるうえで大切であることを、問題提起をしながら論じている。

- 3 グローバリズムや構造改革による、効率性や「人の目」が過剰な社会の変化について具体例を交えて説明し、私たちの生きる意味に与える影響について論じている。
4 日本人が受け入れたグローバリズムや構造改革で社会がどう変わるのかを説明し、私たちの生きる意味の本質が効率性や「人の目」の意識となったと論じている。

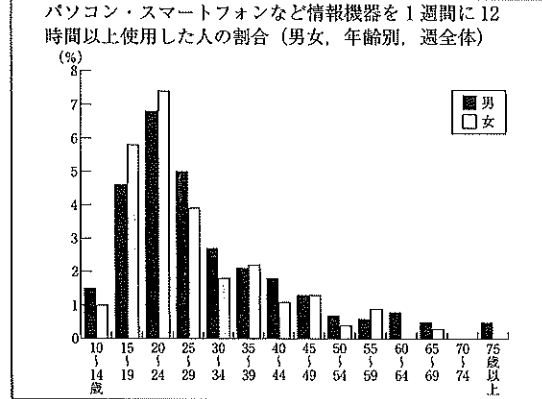
問五 中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」に、情報機器の使用状況について調べ、話し合いをしている。次のグラフ1、グラフ2、グラフ3と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

グラフ1



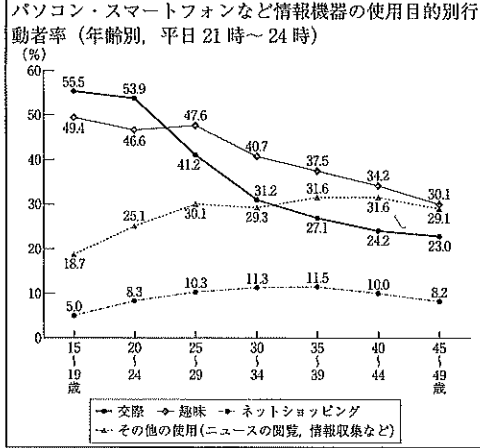
総務省「平成28年度社会生活調査」(生活時間)より作成。

グラフ2



総務省「平成28年度社会生活調査」(生活時間)より作成。

グラフ3



総務省「平成28年度社会生活調査」(生活時間)より作成。

Aさん 本日は、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の使用の現状と問題について考えてみましょう。これらは私たちの生活に欠かせないものですが、若い世代の「パソコン・スマホ依存」が社会問題になっているようです。若い世代はパソコンやスマートフォンなどの情報機器をどのようにとらえているのでしょうか。

Bさん それを考えるためにグラフ1を見てみましょう。平成28年度にパソコン・スマートフォンなどの情報機器を使用した割合を調査し、性別・年齢別に示したものです。使用とは、学業や仕事以外の使用のことをいいます。使用した割合の平均は全体で約6割となっています。

Cさん そうですね。さらに、年齢別に注目すると、Dさん「パソコン・スマホ依存」の人はパソコンやスマートフォンを使っていないと落ち着かないと聞きますが、長時間使用してしまう人はどのくらいいるのでしょうか。

Cさん グラフ2を見てください。これは情報機器を一週間に十二時間以上使用した人の割合を年齢別に示したものです。

Bさん 若い人ほど多くの時間を情報機器の使用に費やしていると言えそうですね。

Aさん 10歳から14歳の割合が低いのは、そもそもスマートフォンやパソコンを持っていないからかもしれませんね。パソコンももちろんですが、スマートフォンはオンラインゲームなどに、より気軽に使えてしまうようなので、大人より判断能力の劣る子どもには持たせないという親も多いと思います。

一方で、15歳から24歳の割合が高いのは、中学生から大学生までを含み、学生は自由に使える時間が多いことが理由だと思えます。

Dさん では、次に、パソコンやスマートフォンを持っている人は長い時間どのような目的で使っているのかを考えてみましょう。

Cさん グラフ3を見てください。パソコンやスマートフォンの使用率が最も高い21時~24時における使用目的を年齢別に示したものです。

Dさん 上位二項目から見る情報機器の使用目的の傾向から、15歳~24歳までのグループ、25歳~34歳までのグループ、35歳~49歳までのグループと、大きく三つに分けられると思います。

Aさん 今回は若い世代について考えたいので、15歳~24歳までのグループについて考えてみましょう。

Bさん この年齢層には特有の傾向がありますね。

Aさん そうですね。グラフ2とグラフ3からは、15歳~24歳までのグループは、一週間に十二時間以上の時間を、 を目的として使用している人が一番多いということが読み取れます。ここから、この年齢のグループは情報機器を通じて自分にとって大切な他者となることが多くの時間を使っているのだと思います。

Dさん そうですね。今回の話を通じて、パソコンやスマートフォンなどの情報機器の使用について、考察を深められたと思います。

(ア) 本文中の に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 60~64歳以上から男性の使用割合が女性より下回っていて、20~24歳の女性の約半分以上となっている。

2 男女共に20~24歳の使用割合が最も高くなっていて、20~59歳では男性より女性の使用割合が高くなっている。

3 10~14歳の男女の使用割合に差はあまり見られないが、20~24歳では最も男女の使用割合の差が大きくなっている。

4 女性の使用割合は20~24歳で最も大きく、減少率が最も大きい55~59歳の二倍以上となっている。

(イ) 本文中の に適する「Aさん」のことを、次の①~④の条件を満たして書きなさい。

① 書き出しの「一週間に十二時間以上の時間を」という語句に続けて書き、文末の「を目的として使用している人が一番多い」ということが読み取れます。という語句につながる一文となるように書くこと。

② 書き出しと文末の語句の間の文字数が二十以上三十以内となるように書くこと。

③ グラフ2とグラフ3から読み取った具体的な内容に触れていること。

④ 「費やしている」「割合」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

(問題文は、これで終わりです。)